王羲之父子の「蘭亭詩」

長谷川　滋成

羲之父子の「蘭亭詩」は一四篇

『晉書』巻八〇の王羲之伝には「七子有り、名を知らるる者は五人」とあり、玄之・凝之・徽之・操之・献之の名を挙げる。残り二人のうち一人は、『王氏譜』によると肅之で四男、もう一人は『世説人名譜』にある渙之で、これは三男。以上によって七人の子を上から順に並べると、玄之・凝之・渙之・肅之・徽之・操之・献之となる。また『劉瑾集』によると、羲之には娘が一人おり、劉暢と結婚して瑾を生んだ。従って羲之の子は息子七人、娘一人ということになる。

八人の子で生卒年が判明しているのは七男の献之だけだが（注1）、羲之が郗鑒の娘と結婚したのが三二〇年、羲之一八歳の時とされるので、結婚二年後に長男が生まれ、以後七人の子が三年間隔で生まれたと仮定すると、それぞれの生卒年は次のようになる。なお一人娘は四男と五男との間に生まれたとする。括弧内は羲之の年齢。

玄之＝三二二～？（二〇歳）
凝之＝三二五～？（二三歳）
渙之＝三二八～？（二六歳）
肅之＝三三一～？（二九歳）
娘＝三三四～？（三二歳）
徽之＝三三七～三八？（三五歳）
操之＝三四〇～？（三八歳）
献之＝三四四～三八八（四〇歳）

羲之といえば羲之が主催した蘭亭の会で作った詩及び序が想起され、この蘭亭の会には六男の操之を除く六人が参加している。蘭亭の会は永和九年（三五三）の三月三日、会稽郡の山陰県（今の浙江省紹興県）の蘭亭で、執り行った禊の祭事である。これに参加した者は四二人だが、参加者には詩を作ることが課せられた。時に一〇歳（推定）だった七男の献之は詩ができなかったが（注2）、羲之（五一歳）は六篇、凝之（推定二九歳）・肅之（推定二三歳）・徽之（推定一八歳）はそれぞれ二篇、玄之（推定三二歳）・渙之（推定二六歳）はそれぞれ一篇で、全部で八篇。羲之の詩も合わせて、以下、羲之父子の「蘭亭詩」一四篇（注3）を考察することにする。

子の「蘭亭詩」―蘭亭の風景と俗念の解放

まずは長男玄之の「蘭亭詩」。

1　松竹挺巖崖　松竹は巖崖に挺んで
2　幽澗激清流　幽澗に清流激す
3　消散肆情志　消散して情志を肆ままにし
4　酣暢豁滞憂　酣暢して滞憂を豁かん

五言の本詩の内容は、前半二句、後半二句に分かれる。前半は蘭亭の風景で、それは羲之の序の「此の地に崇山峻嶺茂林修竹有り、又た清流激湍の、左右に映帯する有り」と符合する。後半は心情の吐露で、こうした蘭亭の風景に身を置くと、俗念から解放されるといい、それは羲之の序の「一觴一詠は、亦た以って幽情を暢叙するに足る」と符合する。

玄之の前半二句にうたう蘭亭は「巖崖」「幽澗」がある、俗人を受け入れない厳しい地形だが、次男凝之の五言の「蘭亭詩」に、

1　氤氲柔風扇　氤氲として柔風扇き
2　熙怡和気淳　熙怡として和気淳し

とうたう蘭亭は「柔風」「和気」がある、俗人をも受け入れる優しい風景だが、これは羲之の序の「是の日や、天は朗らかに気は清み、恵風は和暢す」と符合する。凝之はこうした蘭亭の風景に身を置いて、それを楽しみゆったりした思いに浸る。

3　駕言興時遊　駕して言は時遊を興び
4　逍遥暎通津　逍遥して通津に暎す

「時遊」とは三月三日の蘭亭の遊びのことだが、3句は遊びの喜びだけをうたうのではない。「駕言」は『詩経』邶風・泉水の「駕して言は出遊し、以って我が憂ひを写かん」をふまえ、「逍遥」は『荘子』の逍遥遊篇に基づくことを思えば、凝之の後半も兄玄之の後半同様に、「情志を肆」ままにし、「滞憂を豁」き、俗念から解放される喜びを内在させている。表現の仕方としては直截的な玄之と、間接的な凝之との違いがある。

玄之と凝之に共通するのは、蘭亭の地に身を置くと、俗念から解放されるということである。玄之・凝之以外の「蘭亭詩」もこの枠を大きく出るものではない。四男の肅之の四言・五言の二詩もそうである。

1　在昔暇日　在昔　暇日
2　味存林嶺　味は林嶺に存す
3　今我斯遊　今我れ斯に遊び
4　神怡心静　神怡び心静かなり

蘭亭の「林嶺」で「遊」ぶと、「神」「心」は「怡」び「静」かになる。4句は『荘子』天道篇に「水静かなれば猶ほ明らかなり。而るを況んや聖人の心の静かなるをや。天地の鑒なり、万物の鏡なり」、左思の「招隠詩二首」其の二に「前に寒泉の井有り、聊か心神を瑩くべし」とある。

1　嘉会欣時游　嘉会に時游を欣び
2　豁爾暢心神　豁爾として心神を暢ばしむ
3　吟詠曲水瀬　曲水の瀬に吟詠し
4　淥波転素鱗　淥波に素鱗転ず

蘭亭の「曲水の瀬」で「吟詠」していると、「心神を暢」ばす

ことができる。

五男徽之の四言の「蘭亭詩」。

1　散懐山水　懐ひを山水に散じ
2　蕭然忘羈　蕭然として羈がるるを忘る
3　秀薄粲穎　秀薄は粲として穎き
4　疎松籠崖　疎松は崖を籠ふ
5　遊羽扇宵　遊羽は宵に扇こり
6　鱗躍清池　鱗は清池に躍る
7　帰目寄歓　目を歓びを寄するに帰し
8　心冥二奇　心は二奇に冥くす

「粲として穎く秀薄」「崖を籠ふ疎松」「宵に扇こる遊羽」「清池に躍る鱗」――蘭亭をうたう徽之のこの風景には、玄之の厳しい風景と、凝之の優しい風景とがある。こうした蘭亭の地に身を置くと、「懐ひを散じ」、「羈がるるを忘れ」れ、「二奇に冥」くすることができる。「二奇」とは天台山（天台宗の聖地）にある赤城山と瀑布で、俗外にある景物。

徽之の本詩はこれまでの詩とは違って、中の四句に蘭亭の風景をうたい、心情の吐露はその前後に置いていることである。

以上の詩は、眼前の厳しくも優しい蘭亭の風景をうたうとともに、そこに身を置くと、心神がのびのびし、俗念から解放される喜びを合わせてうたう。それぞれの詩から共通する語を抜き出して見ると、「松竹」「巖崖」「幽澗」「清流」（玄之の12句）＝「柔風」「和気」（凝之の12句）＝「林嶺」（粛之の2句）＝「曲水の瀬」「淥波」「素鱗」（粛之の34句）＝「山水」「秀薄」「疎松」「崖」「遊羽」「宵」「鱗」「清池」（徽之の13456句）、「時遊を興ぶ」（凝之の3句）＝「斯に遊ぶ」（粛之の3句）＝「時遊を欣ぶ」（粛之の1句）、「消散す」「酣暢す」（玄之の34句）＝「豁爾として」（粛之の2句）＝「蕭然として」（徽之の2句）、「情志を肆ままにす」「滞憂を豁く」（玄之の34句）＝「神怡び心静なり」（粛之の4句）＝「心神を暢ばす」（粛之の2句）＝「懐ひを散ず」「羈がるるを忘る」（徽之の12句）となる。

子の「蘭亭詩」――老荘の哲学称賛

ところで、徽之のもう一首、五言の「蘭亭詩」はこれまでの五詩とは異なる。

1　先師有冥蔵　先師は冥く蔵する有り
2　安用羈世羅　安くんぞ世羅に羈がるるを用ひんや
3　未若保沖真　未だ若かず沖真を保ち
4　斉契箕山阿　斉しく箕山の阿に契るに

本詩は老荘ないし老荘の道を究めた「先師」及び帝堯時代に「箕山」に隠棲していた隠者の許由を題材として、「世羅に羈がれず、「沖真を保」つ生き方を称えるとともに、自分もそうありたいと念じている。「沖」は『老子』第四章に「道は沖しくして之を用ふるに或に盈たず、淵として万物の宗に似たり」とあり、「真」は『老子』第二十一章に「窈たり冥たり、其の中に精有り。其の精甚だ真なり、其の中に信有り」とあり、ともに老荘の語で

ある。

徽之の本詩と同様な詩は、次男の凝之の四言詩「蘭亭詩」にもある。

1　莊浪濠津　莊は濠の津に浪ひ
2　巢歩穎●　巢は穎の湄に歩む
3　冥心真寄　冥心を真に寄すれば
4　千載同帰　千載帰するを同じくせん

「莊」は莊子で、莊子が「濠の津を浪」うたことは、『莊子』秋水篇に「莊子　恵子と濠の梁の上に游ぶ。云々」とあり、「巢」は巢父で、巢父が「穎の湄を歩」んだことは、『史記』巻六一伯夷伝の注に引く皇甫謐『高士伝』に「時に巢歩有りて犢を牽きて之に飲ましめんと欲す。云々」とある。凝之は莊子がかつてしたように、いま蘭亭の「津を浪」い、また巢歩がかつてしたように、いま蘭亭の「湄を歩」んで、莊子・巢歩になりきり、自分も二人と同じように「冥心を真に寄」せ、「帰」する所は「千載」前の二人と「同」じでありたいと念じている。

三男の渙之の詩も徽之・凝之の詩と同じと見てよい。

1　去来悠悠子　去来す悠悠たる子
2　披褐良足欽　褐を披て良に欽ふに足る
3　超跡修独往　跡を超げて独往を修め
4　真契斉古今　真契は古今に斉し

「褐を披」ている人は『老子』第七十章に「是を以って聖人は褐を披て玉を懐く」とある聖人のことで、それは老子が理想とする人物。「独往」は『莊子』在宥篇に「六合に出入し、九州に遊び、独往独来す。是れを独有と謂ふ」とある独往で、それは自然に身を任せて世俗を顧みないことである。渙之は「褐を披」た聖人を「欽」い、「独往を修」め、「真契」を希求する生き方は、老子・莊子の「古」も、自分の「今」も「斉」しく変わらぬという。

右の徽之・凝之・渙之の三詩は、眼前の蘭亭の風景はうたわず、老子・莊子という世俗を顧みない過去の人物を題材とし、「沖真」（徽之の3句）、「真に寄す」（凝之の3句）、「真契」（渙之の4句）の「真」を希求することに重点が置かれる。このように専ら老莊の哲学を称える詩がいわゆる玄言詩で、羲之の子の次男・三男・五男がその玄言詩を作っている。

羲之の「蘭亭詩」―子と類似の詩

父の羲之の「蘭亭詩」六篇はといえば、子らに似た詩もあるが、似ない詩もある。

子らに似た詩として、風景と心情を合わせうたうのが、次の四言詩である。

1　代謝鱗次　代謝して鱗のごとく次ぎ
2　忽焉以周　忽焉として以って周る
3　欣此暮春　此の暮春を欣び
4　和気載柔　和気は載ち柔らぐ
5　詠彼舞雩　彼の舞雩に詠じ
6　異世同流　世を異にするも流れを同じくす
7　迺携斉契　迺ち携へて斉しく契り

8　散懐一丘　懐ひを一丘に散ぜん

「和気は載ち柔らぐ」は次男の凝之の五言詩に「熙怡として和気淳し」とあり、「懐ひを一丘に散ぜん」は五男の徽之の四言詩に「懐ひを山水に散ず」とあった。なお「舞雩」とは雨乞い祭りの舞いをするための土壇のことで、これは『論語』先進篇の「（曾晳）曰はく、莫春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて帰らん」をふまえる。羲之がこの蘭亭でいま行っていることは、曾晳とは「世を異」にするが、「流れは同」じなのである。「流」れとは、曾晳が『論語』で言っている世俗を離れた人生の楽しみのことである。曾晳は孔子の弟子だが、言っていることは老荘の思想に通じている。だから「懐ひを散」ずることができる。

子らに似た詩で、専ら老荘の哲学を称えるのが、次の五言詩である。

1　猗歟二三子　猗歟二三子よ
2　莫非斉所託　託する所を斉しくするに非ざる莫し
3　造真探玄退　真に造りて玄退を探らん
4　渉世若過客　世を渉るは過客の若し
5　前世非所期　前世は期する所に非ず
6　虚室是我宅　虚室は是れ我が宅なり
7　遠想千載外　遠く千載の外を想ひ
8　何必謝曩昔　何ぞ必ずしも曩昔に謝せん
9　相与無所与　相ひ与にするも与にする所無く
10　形骸自脱落　形骸は自ら脱落す

「真に造る」の「真」は先に説明したし、『荘子』漁父篇にも「孔子愀然として曰はく、請ひ問ふ、何をか真と謂ふやと。客曰はく、真とは精誠の至なりと」とある。「玄退」の退は根の誤りか。「玄根」ならば盧諶の「劉琨に贈る詩」に「其の玄根に処り、廓焉として結ぶこと靡し」とあり、張衡の『玄図』に「玄とは形無きの類にして、自然の根なり。太始に作こり、与に先を為すもの莫し」とある。「虚室」は『荘子』人間世篇に「彼の闋者を瞻るに、虚室白を生じ、吉祥止まる」とある。これは玄言詩といっていい。

羲之の「蘭亭詩」―時間の推移

次に、子らに似ない詩を取り上げる。似ない内容としては、時間の推移をうたうものと、人間の寿命をうたうものの、二つである。

時間の推移をうたうものは、右の四言詩の冒頭に「代謝して鱗のごとく次ぎ、忽焉として以って周る」とあったし、人間の寿命をうたうものは、五言詩の最後に「相ひ与にするも与にする所無く、形骸は自ら脱落す」とあった。

次の詩は時間の推移を正面にすえてうたう。

1　悠悠大象運　悠悠として大象運り
2　輪転無停際　輪転して停まる際無し
3　陶化非吾匠　陶化は吾が匠むるに非ず
4　去来非吾制　去来は吾が制するに非ず
5　宗統竟安在　宗統竟に安くにか在る

6　即順理自泰　即ち理に順ひて自ら泰らかなり
7　有心未能悟　有心は未だ悟ること能はずして
8　適足經利害　適足するも利害に經はる
9　未若任所遇　未だ若かず遇する所に任せて
10　逍遥良辰会　良辰の会に逍遥するに

「悠悠」と「停まる際無」く、「輪転」し「運」る「大象」。「大象」は形の無いもので、時間もその一つ。時間というものは「吾」が「匠」めたり「制」したりすることができないばかりか、「宗統」が「安」くに「在」るかも分からず、「理」に「順」って「自」ら「泰」らかに動いているものなのだ。羲之は時間の推移からうたい起こして、どううたい収めるのか――。時間の推移をうたう意図はどこにあるのか――。推移する時間に身を置かざるを得ないからには、蘭亭のこの「良辰の会」に「逍遥」するのが一番である、とうたい収める。「逍遥」は『荘子』の語であることは、すでに述べておいた。

次の詩は時間の推移を直截的にはうたわないが、うたい収めは右の詩と同じである。

1　鑑明去塵垢　鑑明らかなれば塵垢を去るも
2　止則鄙郄生　止まれば則ち鄙郄生ず
3　体之周未易　之を体するは周って未だ易からざるも
4　三殤解天形　三殤は天形と解さん
5　方寸無停主　方寸　停主無く
6　務伐将自平　伐つに務めて将に自ら平らかならんとす
7　雖無絲与竹　絲と竹と無しと雖も
8　元泉有清声　元泉に清声有り
9　雖無嘯与歌　嘯と歌と無しと雖も
10　詠言有余磬　詠言に余磬有り
11　取楽在一朝　楽しみを取るは一朝に在り
12　寄之斉千齢　之に寄せて千齢に斉しくせん

うたい収めの「楽しみを取るは一朝に在り、之に寄せて千齢に斉しくせん」は、前の詩のうたい収めと同じである。その「楽しみ」は具体的には「元泉」にある「清声」であり、「詠言」にある「余磬」である。なお冒頭の「鑑明らかなれば塵垢を去るも、止まれば則ち鄙郄生ず」は、『荘子』徳充符篇の「鑑明らかなれば則ち塵垢止まらず。止まれば則ち明らかならざるなり。久しく賢人と処れば、則ち過ち無し」をふまえ、言わんとする所は、賢人と処ることの大切さをいう。この賢人は先の聖人同様、老荘の理想とする人物。

羲之の「蘭亭詩」――人間の寿命

右の詩の「三殤は天形と解さん」は若死にもその人の運命だとしよう、という意味で、人間の寿命に言及するが、次の詩は人間の寿命を正面にすえてうたう。

1　合散固有常　合散は固より常有るも
2　修短定無始　修短は定めて始め無し

「合」ったり「散」ったりするのにきまりが有るのは勿論だが、「修」かったり「短」ったりするのは始めから定まっているので

は無い。人と人との出合いには必ず別れがつきもの。しかし人間の寿命が長いか短いかは、始めから決まっているわけではなく、人によって違うのである。

3　造新不暫停　新を造ること暫らくも停まざるに

4　一往不可起　一たび往けば起つべからず

「新」しいものは「暫」くも「停」まることなく「造」り出されるが、「一」たん「往」ってしまうと「起」ち上がることができない。人は休むことなく次から次へと新たに生まれてくる。しかし一たん死んでしまうと生き返ることはできない。

5　於今為神奇　今に於いては神奇為るも

6　信宿同塵滓　信宿にして塵滓に同じ

「今」は「神奇」だとしても、「信宿」のうちに「塵滓」同然となる。人は今は霊妙な存在である。しかし忽ちのうちに無価値なものになってしまう。

7　誰能無慷慨　誰か能く慷慨無からんや

8　散之在推理　之を散ずるは理を推すに在り

「誰」でも「慷慨」するが、それを「散」らすには「理」を「推」究する以外ない。人は誰だって死に対して悲憤慷慨しない者はいない。その悲憤慷慨を取り除くには真理を究める以外ない。

9　言立同不朽　言の立つこと不朽に同じきも

10　河清非所俟　河清は俟つ所に非ず

「言」を立てることは「不朽」と同じだが、「河」が「清」むのを俟ってはおれない。不朽の名に等しい後世まで伝わる言葉を残すのもいい。しかし黄河の水が清む千年先まで伝わるのは期待できない。

羲之は死を直視し、掛け値なしで受け止めている。生まれたからには、死は必ずやってくるし、死が早いか遅いかは人によって違う。そこには「理」があって、その「理」が違いを生じさせている。だからその「理」を究めれば、慷慨しなくてもいいのである。

羲之の生死に対する考え方

その「理」とは何か―。羲之は序で次のように述べている。

古人云へり、死生も亦た大なりと。豈に痛ましからずや。昔人感を興こすの由を覽る毎に、一契を合するが若し。未だ嘗て文に臨みて嗟悼せずんばあらざるも、之を懐に喩る能はず。固より知る、死生を一にするは虚誕たり、彭殤を斉しくするは妄作為るを。

古人はいう、生と死とは重大な問題であると。なんと痛ましいことか。昔の人々が感慨を述べたわけを見るたびに、私も彼らと同じ思いになった。昔の人々の文章を手にしていつも悲嘆にくれたが、それをわが心に明らかにすることはできなかった。しかし死と生とを同じだとするのはでたらめであり、長寿と夭折とを同じだとするのはでたらめであることが分かった。

文末の「死と生とを同」じだとし、「長寿と夭折とを同」じだとするのは、老荘の思想である。羲之はそれを「でたらめだ」と

言い、きっぱりと否定する。とすると、羲之の言う「理」は、老荘の言う「理」ではないことになる。

羲之は序で次のようにも述べている。

向の欣びし所は、俛仰の間に、已に陳跡と為る。猶ほ之を以って懐ひを興こさざる能はず。況んや修短は化に随ひ、終に尽くるに期するをや。

以前の喜びは、たちまちのうちに、昔のふることとなる。こんなことでさえ人々は心を動かさずにはいられない。ましてや命の長い短いは天地自然の理に任せ、ついに死んでしまうことに対してはなおさらである。

文末に「ましてや命の長い短いは天地自然の理に任せ、ついに死んでしまうことに対してはなおさらである」と言う「天地自然の理」が、羲之の言う「理」である。「天地自然の理に任せる」の原文は「化に随ふ」。「化」とは造物主が万物を生育したり、死滅させたりする造化の力のこと、言い換えれば宇宙を運行させる原理である。「随」とは任せることで、「化」には逆らうことも、楯つくこともできず、なるがままに身を委ねるほかないのである。身を委ねるほかない「化」、それは言い換えれば推移する時間のことである。人は推移する時間には逆らうことも、楯つくこともできないのである。

次の詩は「造化の工」をうたう。

1　三春啓墓品　三春　墓品を啓き
2　寄暢在所因　寄暢　因る所に在り
3　仰視碧天際　仰ぎて碧天の際を視
4　俯瞰淥水浜　俯して淥水の浜を瞰る
5　廖聞無涯観　廖聞たり涯り無き観
6　寓目理自陳　目を寓るもの理自ら陳ぶ
7　大矣造化工　大なり矣造化の工
8　万殊莫不均　万殊　均しからざる莫し
9　墓籟雖参差　墓籟　参差たりと雖も
10　適我無非親　我に適ひて親しむに非ざる無し

「涯り無」い景「観」、「目を寓」る万物、それらはみな自然の「理」のまま。「造化の工」は偉大で、「万」物はみな「殊」なるが、源は「均」しい。「造化の工」造物主の功績は偉大だと、羲之は言う。

羲之父子の「蘭亭詩」の意味するもの

羲之の子の八篇の詩は、大きく二つに分かれる。一つは蘭亭の風景と俗念を解放する心情を合わせうたうもの、もう一つは専ら老荘の哲学を称賛するものである。この二つの傾向は、老荘思想に基盤を置き、自然の中に生きる場を見いだすという、当時の思潮を形成することになる。一般に玄言詩と言われるのがそれである。

羲之の六篇の詩は、大きく三つに分かれる。一つは子と類似のもの、もう一つは時間の推移をうたうもの、最後の一つは人間の寿命をうたうものである。一つ目の詩は玄言詩の流れに乗るものだが、子がうたわない時間の推移をうたう二つ目と、人間の寿命をうたう三つ目とは、結局は裏表の関係だと思われる。つまり時

間が推移することによって、人間の寿命は死に近づく。寿命が死に近づいても抗することができず、ただただ推移する時間に身を委ねるほかない。要するに、推移する時間の中で与えられた自分の寿命を全うするほかないことになる。となると、羲之は自分の人生に何を求めるのか―。それは「良辰の会に逍遥」することであり、「楽しみを取」ることであり、「我に適」うことに親しむことである。これによってつかの間の人生を充実させたい、とするのである。

ところで、羲之は子らのうたわない時間の推移と人間の寿命をなぜうたうのか―。子らはまだ若く、羲之は五十を過ぎていたことが大きな要因だろうが、ほかにこの日が三月三日であること、また羲之の周辺に不幸が多かったことなども考えられよう。

三月三日の禊（注4）の祭事とは元来、水辺で心身を清め、病気や邪気を取り除き、大きな幸いを祈る宗教的な儀式で、水辺で蘭を執って魂を招き、不祥を取り除く儀式であった。しかし時代が下るにつれて、この儀式に飲むことが加わって宴遊的・遊戯的になり、さらに詩を作ることが加わって、一段と宴遊的・遊戯的色彩が濃くなった。羲之が主催したこの蘭亭の会も宴遊的・遊戯的色彩が濃いが、羲之には不祥を取り除くという宗教的な儀式のことも念頭にあったのではあるまいか。不祥を取り除くという儀式に身を置いていると、羲之は人間の寿命について考えずにはいられなかったのではないだろうか。

周辺に不幸が多かったこととしては、天子や王氏一族及び知人・官人の死が考えられる。蘭亭の会は三五三年（五一歳）だったが、それ以前に天子として亡くなったのは、元帝（時に羲之二〇歳、以下同じ）・明帝（二三歳）・成帝（四〇歳）・康帝（四二歳）。王氏一族で死んだ人は、王澄（一〇歳）・王廙（二〇歳）・王敦（二一歳）・王導（三七歳）・王允之（四〇歳）・王恬（四七歳）。知人・官人としては温嶠（二七歳）・郗鑒（三七歳）・庾亮（三八歳）・庾冰（四二歳）・庾翼（四三歳）・王濛（四五歳）・劉惔（四六歳？）・褚裒（四七歳）・顧和（四九歳）・許詢（四九歳？）。この中には羲之の妻の父に当たる郗鑒のように七〇歳を超える者もいれば、明帝のように二七歳で亡くなった者もいる。羲之は死んでゆく多くの人たちを見て、推移する時間や人間の寿命について考えずにはいられなかったのではないだろうか。

以上、王羲之父子の「蘭亭詩」一四篇を考察した結果、子の八篇と羲之の六篇とは詩の内容に違いがあり、それぞれの詩の意味するところについても考察したが、「蘭亭詩」は貴族たちの単なる遊びの詩ではなく、人間存在について考えた詩、ということができる。

（注）

1　『世説新語』傷逝篇16の劉孝標注に「献之は泰元十三年を以って卒す。年四十五」とある。「泰元十三年」は三八八年。従って生年は建元二年、三四四年となる。また、五男の徽之については傷逝篇に「王子猷・王子敬は倶に病篤くして、子敬先に亡す。（略）（子猷は）因りて慟絶すること良久しく、

月余にして亦た卒す」とあるのに拠って、卒年を三八八？年とした。子猷は徽之の字、子敬が献之の字。

2　献之には「蘭亭詩」はないが、献之の妾を詠んだ「情人桃葉歌二首」「桃葉歌」と「詩」が残っているが、本論では取り上げない。

3　一四篇それぞれの引用書は拙著『東晉詩訳注』（汲古書院）参照。

4　「禊」という行事の変遷に関しては小尾郊一『中国文学に現れた自然と自然観』（岩波書店）に詳しい。

（広島大学）